

の娘の腹に生れし子を養子に定て、系圖并代々の御感書、手次證文不殘相傳也、其比信元の家來跡部駿河、同上野と申て、甲州の主護代預り、一類餘多有て、何事も信元の旨を背き横行しけり、信元二期の後、伊豆千代に跡部背きける、甲州に輪寶一揆日一揆とて、兩一揆あり、輪寶一揆の待跡部に一味し、逆心を企つ、信長方は加藤も早世し、日一揆の人々計にて、度々に合戦ありしかども、運や此時に盡果けんから河合戦に日一揆皆打負、信長は忍て信濃へ打越、京へ上り給ひける、此時甲斐は鎌倉の分國なれば、持氏を頼被申は、やがて御加勢を可給に京へ信長被參ける故に、京上方と鎌倉殿の御意趣のをこり初是なり、略

〔國花萬葉記八甲斐國〇中知行高貳拾貳千石〇石數有誤脫

府。中御城 江戸ヨリ卅六里

當國ハ武田晴信勝頼之後、天正十年、穴山梅雪、川尻肥後守少々、内守護とす、御領國と成、天正十八年、少將秀勝、秀次弟加藤遠江守兩人領之、城地未決、

府中當御城主 甲府中納言綱豐卿正三位

前代御城主之次第御知行三拾五万石〇中略

淺野彈正少弼長政 同左京大夫幸長紀州和歌山所替 平岩主計頭親吉 六萬石 慶長五年 尾州清

州所替 右兵衛督義直慶長十二年 其後御番城ト成 其後又駿河大納言忠長 國千代丸

後預之 烏井土佐守成次駿河亞相公家臣 寬永九年以後御番所ト成 左馬頭綱重殿 二十

五萬石 寬文元年 是カ當御城主ニ至ル

同國谷村當御城主 江戸ヨリ二十六里實父戸田山城守 秋元但馬守喬朝 知行二萬三千石〇中略

當城前主代々

淺野彈正少弼長政 同左京大夫幸長 鳥居士佐守成次三萬八千石 大納言家臣 同淡路守成行 同

高 秋元但馬守安朝 壹萬八千石 寬永十年 同越中守富朝同高 是カ當城主ニ至